

琉球大学学術リポジトリ

通常の学級における特別支援教育の観点に基づいた
授業づくりー共に学ぶ算数・国語の授業実践を通し
てー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2023-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019852

通常の学級における特別支援教育の観点に基づいた授業づくり

—共に学ぶ算数・国語の授業実践を通して—

鈴木 陽子

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・うるま市立彩橋小学校

1. はじめに

平成19年度から始まった日本の特別支援教育は、通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校という学びの場を連続性でつなぐ柔軟な仕組みを整備することや、障害のある子と障害のない子が可能な限り同じ場で共に学ぶことを目指すことを追求している。しかし2022年4月に文科省が、特別支援学級の児童が通常の学級で学ぶ時間を週の半以下に制限するとの通知を出したことをはじめ、保護者や本人の意向に反して通常の学級で学べない子がいることが問題視され、同年9月、国連の障害者権利委員会から「分離教育」の中止に向けて障害の有無にかかわらず共に学ぶ「インクルーシブ教育」に関する国の行動計画を作るよう求められた。

障害のある子が教育を受ける時に「合理的配慮」を提供することは、障害者権利条約に示されており、障害者差別解消法により規定され義務化されている。学校でも、子どもが学びたい場で教育を受ける時に、学習や活動への参加を制限されることなく他者と共に学ぶことが可能となるよう配慮が提供され環境を調整する必要がある。

しかし、今の私たちの学校や学級そして日々の授業は、子どもが参加できる場・参加したい場となるように配慮が提供され環境が調整されているだろうか。これまでの授業の枠組みに入ることができない子に対して、私たちの側から積極的に配慮のある授業をつくっているだろうか。「この子の能力が足りない」「同じ場にいてもついてこられないのなら意味がない」「別の場で学んだ方がこの子のため」と、子ども個人の能力に原因をおき、共に学ぶ場から排除したり参加の機会を奪ったりしてはいないだろうか。

現在沖縄県においても特別支援学級の数が急増し、場を分けて学ぶ子は増加している。「一人一人を手厚く支援できる」「障害の理解が進んだ」といった“良い”とされる面がある一方で、場を分けることを前提とした支援のみでは、本来の特別支援教育の理念でもある共生社会の実現とは離れていく現状であるとも言える。しかし、国連の勧告や多様性を尊重する国際社会の動向を踏まえると、今後、障害の有無にかかわらず多様な子どもが通常の学級で共に学ぶ機会は増えていくだろう。

これからの共生社会を考えると、学校は、そして日々の授業は、学習内容を習得する場であると同時に障害の有無に関わらず多様な子が共に学ぶことを前提とした誰もが参加できる・参加したくなる場であること、多様性を尊重し一人一人のより豊かな生き方をサポートしていく場であることが必要になると考えられる。「共生社会の実現」という、私たちが求める社会の形成に向けた理念を具現化した授業はどのような授業なのか。これまでの学校や授業を問い直しながら少しずつ実践を積み重ねていきたい。

2. 研究の目的

本研究は、通常の学級において特別な支援を必要とする子も含めた誰もが参加できる・参加したくなる授業づくりを行い実践することによって、誰もが共に学ぶ、共生社会の形成の基礎となる授業のありかたの一例を提案することを目的とする。

3. 研究の方法

学級の児童を、㊶通常の学級の児童、㊷通常の学級の中で気になる児童、㊸特別支援学級在籍の児童とし、一人一人の児童が意欲的に授業に参加できるための授業のありかたや支援のしかたを検討する。また㊶㊸の児童については、それぞれの児童が授業に参加し共に学ぶことの意義を明確にするため、特別支援学校の教育課程の自立活動の内容を参考にして一人一人の目標を設定し支援や見とりを行う。そして、授業実践を通じた児童の様子や行動観察の記録、ワークシート、聞き取り等を分析し考察する。

4. 授業実践 (学校：A小学校3年B組 時期：2022年9月)

3年B組に在籍する児童28名と特別支援学級(自閉症・情緒障害)児童3名が、共に学ぶ算数・国語・学活の授業を構想し授業実践を行った。本稿では、普段は㊸の児童3名が場を分けて特別支援学級で学んでいる算数と国語の実践について詳述する。

(1)算数の実践

①単元名 「長さ」～長い長さのたんいや表し方を考えよう～ (全7時間)

②単元の目標

通常の学級の児童、特別支援学級の児童ともに、本単元の目標は、○長さの単位(キロメートル(km))について知り、測定の意味を理解する[C(1)ア(ア)], ○長さについて、適切な単位で表したり、およその見当をつけ計器を適切に選んで測定したりする[C(1)ア(イ)]である。

③児童の実態把握と個別の目標の設定

全体の目標に加えて本単元では、多様な実態の子どもが参加し共に学ぶことの意義を明確にするため、㊶㊸の児童については、それぞれの実態に応じて指導の参考とする自立活動の内容を踏まえて個別の目標を設定した。実践では㊸の児童の中から㊷の児童3名を抽出し、㊸の児童3名を加えて7種類の実態把握と目標の設定をしたが、本稿では㊸不特定の通常の学級の児童、㊷の児童1名、㊸の児童1名について報告する。表1に㊶㊸の児童の実態把握と個別の目標を示す。

表1 児童の実態把握と目標の設定(一部)

児童	児童の実態把握 (得意なこと・苦手なこと等)	指導の参考とする 自立活動の内容	「長さ」の授業に関する実態と 指導・支援上の配慮事項	「長さ」の学習を通じた目標
㊶ 通常の学級 の中で気 になる児 童	<ul style="list-style-type: none"> 運動が得意である。 発表することがある。褒められると嬉しそうにする。 ぼんやりしていることがよくある。 本人に困り感はない。 知的障害の診断 	2. 心理的な安定 (2)状況の理解と変化への対応に関すること(見通しを持った活動への参加) 3. 人間関係の形成 (3)自己の理解と行動の調整に関すること	<ul style="list-style-type: none"> 紙飛行機を折る作業は苦手だと考えられるので、紙飛行機を選択できるようにあらかじめいくつか折って準備しておく。 容易にできる活動での成就感を味わうことで自信をつけさせ、自己に肯定的な感情を高めていく。 活動や学習へ集中を少しずつ持続できるように、授業の構成を工夫する。 教師の指示が通っているか確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 紙飛行機を飛ばして飛んだ距離を測ったり、学校の外で実際に1kmを歩いたりする活動に楽しんで取り組むことができる。 すごろくで友だちと遊びながら長さの計算をする活動に楽しんで取り組むことができる。 学習や活動に見通しを持って取り組むことができる。
㊸ 特別支援 学級の児 童	<ul style="list-style-type: none"> 動物について詳しい。 武器やシューティングゲームが好きである。 学習面では、学力は少し低めで自信が持てない様子であり、ミスが目立つ。 運動が苦手である。 情緒が不安定で登校しぶり気味である。 話すときの距離が近いときがある。密着したり手を触れてくることもある。 自閉スペクトラム症の診断 	2. 心理的な安定 (1)情緒の安定に関すること(感情の切り替え、折り合いをつける) 3. 人間関係の形成 (2)他者の意図や感情の理解に関すること 6. コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> 安心して学習に参加することができるように、授業内容について事前に伝えておく。 本人の意見や考え、思いを教師や学級の友だちが受けとめ共感できる場面を授業の中でつくる。 感情の切り替えが難しい場合は、気持ちを落ち着かせることのできる場や移動するときの方法を決めておく。 	<ul style="list-style-type: none"> 紙飛行機を飛ばして飛んだ距離を測ったり、学校の外で実際に1kmを歩いたりする活動に楽しんで参加することができる。 すごろくで友だちと遊びながら長さの計算をする活動に楽しんで参加することができる。 自分の思いや考えを、教師や学級の友だちに表すことができる。

④指導計画と授業実践の意図

本単元では、学習内容の習得の際に児童が学級の仲間との体験を共有することを通して学ぶ過程を大切にしたい。学習の中に子どもの育ちと学びにおいて重要な要素が含まれる「遊び」の要素を取り入れ、楽しみながら学ぶ時間を設定した（第1時：紙飛行機を飛ばして長さを比べよう、第5時：すごろくゲームで、友だちと協力して計算しよう）。また、実際に身体を動かし体験しながら学ぶことを重視し、長さの量感を体験的に捉えさせた（第2時：いろいろなものの長さを測ろう、第4時：1 kmはどこまでか歩いて確かめよう）。その際、「およそどれくらいの長さであるか」を見当づけてから測定したり、実測した値と比較させたりすることで、量感の育成につなげた。単元の習熟の時間には、プリント問題を「一人で」「友だちと」「先生と」等、自分に合う学び方を選んで学習に取り組み、主体的に学習する意欲を引き出した（第6・7時）。単元の学習目標と同時に、㊦㊧の児童へは自立活動のそれぞれの目標も意識しながら授業を進めた。学級の児童の全員が楽しい時間を共に過ごす中で、他者との関わりが苦手な子ども、他の子と自然に関わることができるような雰囲気づくりを大切にしたい。

(2)国語の実践

①単元名 対話の練習「山小屋で三日間過ごすなら」 (全3時間)

②単元の目標

通常の学級の児童、特別支援学級の児童ともに、本単元の目標は、○比較や分類のしかたを理解し使うことができる[知(2)イ]、○目的や進め方を確認して話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめることができる[思 A(1)オ]、○目的を意識して、集めた材料を比較したり分類したりすることができる。[思 A(1)ア]である。

③児童の実態把握と個別の目標の設定 (省略…算数と同様に作成)

④指導計画と授業実践の意図

本単元では、「子ども探検隊として山小屋で三日間過ごす」という目的を想定し、その時の持ち物をグループで話し合う活動を通して、考えを広げる話し合いと考えをまとめる話し合いを行った。授業を構想する上で、「みんなと過ごすのが苦手」という児童の実態や特性を考慮し、山小屋に持っていき物は「ひとりでタイム」に一人で遊ぶために持っていきたい物と、「みんなとタイム」にみんなと遊ぶために持っていきたい物の2種類を考えると設定にした。一人一人が大切なものを持っていきたい気持ちを尊重することで、みんなと過ごすことが苦手な児童も山小屋に行く楽しみが生まれ、楽しみの中から苦手なことに向かう意欲が持てるようになって考えたからである。話し合いに活用した用紙にも個別の部屋を描き、個人の持ち物を付せんに書いてそれぞれの個室に入れておくことで、安心してみんなとの話し合いに向かえるような工夫を行った（第1・2時）。

5. 授業の様子と考察

(1)算数の授業の様子（表2）（下線は自立活動の内容を踏まえた個別の目標に関する様子）

表2 算数の授業の様子

㊦	・勉強が得意で学習内容の理解はできる児童が、単元後の感想で「算数があんまり好きじゃなかったけど、1 km 歩いたりして、はじめて算数っておもしろいなと思いました」と記述していた。
㊧	・すごろくの計算では、終始グループでの活動に身を乗り出して友だちとやりとりをしていた。「たまにもどるクンパージョン」では終盤に“もどる”に何度も止まってしまったために、「引けなくなったー！」とグループの友だちと笑いながらどうしようか考えていた。グループでルールを新しく作り、納得して続きを楽しんでいた。 ・第6時では、「友だちと」の方法を選び問題に取り組んでいた。算数の学習が少し苦手な二人がペアになったため様子を見ながらやりとりをつないだ。二人ともそれぞれ別の間違えているところがあったが、分かったことをほめ、「分かった問題をどうやって解いたのか教えてあげてね」と相手に説明する意欲を持たせようと声をかけると、自分なりの言葉で相手に教えようと話し始めた。 <u>聞く時も一生懸命に相手の話を聞く</u> としていた。終わった後に「算数、楽しかったー」とつぶやいていた。
㊨	・単元初めは登校をしぶっており、紙飛行機を飛ばして長さを測る活動には参加できなかった。第5時のすごろくは興味を持ち「すすむクンパージョン」をグループに1枚ずつ配布すると用紙を筆者のところに持ってきて、「これ、あとで〇〇（特別支援学級）に持って行っていいですか」と聞いた。「たくさんあるから、終わったら持って行っていいよ」と伝えると、 <u>安心したようにうなずいてグループに戻り、友だちとすごろく遊びを始めた</u> 。2枚目の時も筆者と同じやり取りを繰り返した。授業が終わると急いですごろくの紙を持って特別支援学級に行った。

<p>・単元が始まって5日目。特別支援学級の担任が筆者に、「いつも子どもたちは、私が『次は3年B組の授業だよ、行っておいで』と声をかけてから支援学級を出て行くのに、今日はいつの間にか算数をしに3年B組に行っていて、支援学級からいなくなっていました」と伝えられた。 ・普段は算数の授業を支援学級で受けている。今回は通常の学級において集団の中で学習したが、学習内容の習得という側面から考えたときにその程度はどうか、実際の単元テストの結果から考えた。㊦の特別支援学級の児童3名の点数は150点満点で[130点/105点/128点]だった(学級平均121.7点)。㊦の児童は115点だった。どちらも普段と同じ程度の得点である。</p>
--

(2)算数の授業の考察

実際に身体を動かして体験しながら学ぶことを重視し、子どもの育ちと学びにおいて重要な要素が含まれる「遊び」の要素を取り入れて楽しみながら学ぶ時間を設定することにより、長さの量感を捉えさせると同時に子どもの学びへの意欲が引き出されたと考えられる。また、学習方法の選択を可能にすることは学びへの主体的な取り組みを促したと言える。さらに友だちとの関わりの中で自分が相手の役に立ったという経験は、自尊感情の育成にもつながるだろう。

学びへの意欲が引き出された結果として、巻尺を使って長さを測る、長さの計算をする等の学習内容の習得が促されたり、他者との関係形成が苦手な子が友だちと共に学ぶ場に意欲的に参加するなど、自立活動の内容を踏まえた個別の目標についても向かう姿が見られたりしたと考えられる。

(3)国語の授業の様子(表3)(下線は自立活動の内容を踏まえた個別の目標に関する様子)

表3 国語の授業の様子

㊦	<p>・授業のはじめに「山小屋」や「川」「森」などの写真を提示すると、子どもたちから「うわあ!」「きれい」「楽しそう」等の声が上がった。森の写真では「鬼ごっこをすると迷子になるんじゃない?」という声も聞かれた。また、準備したアウトドアやサバイバル等の図書資料も、子どもたちは手に取ってよく見ていた。</p>
㊦	<p>・「ひとりでタイム」を設定したことで、どの子にも自分の好きなものごとを考えるワクワク感がうまれた。子どもたちから出やすい「スマホ」「ゲーム」「まんが」等も、「ひとりでタイム」では許容されるので、どの子にとっても安心感があり楽しく参加していた。その後、学習の中心である「みんなとタイム」の遊びや持ち物について、意欲的に話し合いを進めていた。</p>
㊦	<p>・友だちとの関係が苦手(あまり興味を持たない)で、一人で遊ぶことを楽しそうに考え始めた。大好きな「銃」の種類をたまに筆者に教えに来ながら付せんんに書いていた。「一人でタイムの持ち物が決まったら、次はみんなと一緒に遊ぶものを考えて書いてね」と声をかけると、友だちと遊びたい物を考えはじめ、「水てっぽう」や「つりざお」「カメラ」「虫とり」…と次々に書き始めた。</p>

(4)国語の授業の考察

単元や授業の導入時に、子どもたちのイメージを膨らませるための視覚的な情報を提示することで、学習への意欲を引き出すことができたと考えられる。また、教材の設定に「ひとりでタイム」を加えることで、自分の好きなものごとを考えて楽しい気持ちになったり、自分の好きなことが認められる安心感を持ったりすることができ、苦手であった友だちと関わることへの意欲を持つことにつながった。教材の設定を子どもの実態に合わせて変えることが支援の必要な子への配慮になったと同時に、その配慮が他の子にも適していたと考えられる。

6. まとめと今後の研究について

本研究では、通常の学級において特別な支援を必要とする子も含めた誰もが参加できる・参加したくなる授業づくりを構想し実践した。授業づくりの工夫と自立活動の内容を含めた子どもの見とりにより、共に学ぶことの意義を明確にすることができる。今後、児童の実態を踏まえて他教科や単元での検討も重ね、誰もが共に学ぶ共生社会の形成の基礎となる授業のありかたや支援のしかたとして提案していきたい。また環境の調整については、特別支援学級担任や支援員との連携も図りながら進めていく。

引用文献

中央教育審議会報告, 2012, 「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」

文部科学省, 2018, 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)』開隆堂出版。

文部科学省通知, 2022年4月27日, 「特別支援学級及び通級による指導の適切な運用について」